

Title	「はちかつき・上」 解題・ 翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Tohru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1997
Jtitle	三田國文 No.25 (1997. 3) ,p.31- 36
JaLC DOI	10.14991/002.19970300-0031
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19970300-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「はちかつき・上」解題・翻刻

石川 透

解題

ここに紹介する「はちかつき・上」は、「増訂町時代物語類現存本簡明目錄」(『御伽草子の世界』一九八二年八月)の『鉢かつき』の項に、

B 御巫清男旧・奈良絵本挿絵欠 横二冊

(『室町時代物語集』三、一九三九年二月)

と記されている御巫本系統の奈良絵本である。御巫本は、数多い『鉢かつき』の写本版本のうち、唯一の異本系統の孤本として知られていた。近時、秋本鈴史氏により、京都の角屋に、御巫本と同系統の『鉢かつき』が存在することが明らかになり、『室町物語』『浄瑠璃姫物語』と『鉢かつき』(『角屋研究』第六号、一九九六年八月)に翻刻紹介された。期せずして、孤本といわれていたものに二つの伝本が出現したのであるが、御巫本は挿絵が欠け、角屋本は所々の本文と挿絵が欠け、筆者架蔵本は冒頭と下巻が欠けているという具合に、完全な本はない。しかし、三本を合せて考えると、この系統のある程度の姿が復元できそうである。

この御巫本系統の三本は、いずれも江戸時代初期から前期にかけて製作された、横型の奈良絵本である。それぞれの本文の筆跡は異なるものの、角屋本と架蔵本の挿絵の雰囲気などはよく似通っている。御巫本は挿絵が抜き取られているが、その挿絵の存在した箇所は、三本とも全く一致している。このように外面的には非常によく似ており、ひょっとすると同一工房で作られた可能性もあろう。

この三本を同一系統としたように、本文的には極めて近く、三本の校異をとると、同じ誤写と思われる箇所も見受けられる。概して御巫本と角屋本が近く、この二本に共通する脱文も複数存在する。また、三本それぞれの誤写もあり、どの本が勝れているとはいえないようだ。

本書の書誌は、以下の通りである。

所蔵、架蔵

形態、横型袋綴奈良絵本、一冊

時代、「江戸初期」写

寸法、縦一七・五釐、横二五・九釐

表紙、後補金色表紙

外題、左上後補題簽「奈良絵」

内題、ナシ

料紙、斐楮交漉紙

行数、半葉一四行

字高、約一三・五糎

丁数、一六丁

挿絵、八頁

奥書、ナシ

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「」『』括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかったが、煩瑣になるので（ママ）は記さなかった。また、破損による欠字は□で示した。挿絵の掲載は、別の機会に行ないたい。

「はちかつき・上」

（冒頭欠）

われら、もろともに、いまはやらせ給ふ、きよみつてらのくわんをんにまいり、百日さんろう申、しそをくやうして、あゆひをはこひ、たうをこんりうし、こゝろのをよはんとは、かんとんをくたきて、きせひ申さんに、なとか、かなはさるへき。おほしめしたち給へかし」と、のたまひければ、

〔挿絵・第一図〕

女はう、よろこひ給ひて、おもひたち給ふ。

きさらきのはしめのころよりも、きよみつてらに、百日さんろうし給ひけり。さるほとに、心のをよふほと御きせひ、心もことはものこさはんへりける。

すてに、百日と申、あかつきの御夢想に、八十はかりのらうその、きよはらの津のかみ、ゆきかたかまくらに、たゞせ給ひて、「いかに、なんしか申は、ふひんなれとも、三せん大せん世界をたつぬるに、なんしか子になるへき物は、さらになし。それをいかにといふに、なんしは、さきの世に、うしにてあり。せんさいのはなを、つのにておるのみならず、ほりうしなひしゆへにより、なんしに子といふ物なし。また、なんしかつまは、さきのしやうに、くちなはにてありしか、こゝかしこの、みたうのむねうつはりに、小鳥どものすをかけ、子をうみあたゝめしを、おやもろともに、ふくしたりしとかにより、汝か子といふ物さらになし。わかちからにはかなふまし。やまとの国、はせてらのくわんをんにまいりて、きせい申せ」と、御しけんあらたにかうふりて、ゆきかたは、うちおとろきて、女はうにかくとかたりたまふ。

〔挿絵・第二図〕

女はう、大きによりこひて、御夢想にまかせて、やかて、はつせへまいりつゝ、百日さんろうとそ聞えける。さま／＼のしゆくはんは、申にをよはす、きねん、つつしんてし給ひける。さるほとに、すてに、百日にまんしける、やはんはかりに、あらたに、くはんをんの、ようかんひれいの女はうに、けむし給

ひて、心もおよはぬ、からのおり物の大くちに、まきゑの手箱てはばのそてなりなるか、中には何か入たるやらん、をもくとしたるはちに、から物と見えたるはち、うすくとしてうつくしきか、ふつうやうのせいより、大なるをとりそへて、つのかみ夫ごう婦に、給はるとの御しけん有ける。「たし、なんしか申子に、あたゆへき子たねなし。しかれとも、女子を一人あたゆるなり。此子七さいにならんととき、はくのなやみあるへし。そのとき、かのはこそ、ひめにいたかせ、そのうへに、はちをうちきせ候へし。はくのいのち、うするとも、はくのけうやうともなり、ちのために、けうしともなり、世にありかたき、めいしんなるへし」とて、はこを給はりける。ゆめさめて、ふしきにおもひて、いよくよろこひのおもひをなして、見給へは、すなはち、かのはちはこ、ふうふのまへにけんしたり。いそぎ、ふうふともに、よろこひのらひはひまいらせて、御しゆくはうにかへり、きやうたらにをみて、申たてまつるには、くはんけんのほうゑめてたくとりおこなひ、こかねしろかね、たまのふせを、ひきたまふは、めをおとろかすはかりなり。ほうゑすきければ、御けかうとそきこえける。

〔挿絵・第三図〕

さるほとに、きたのかたの、月のさはりとまり、このつきくるしき、あたる十月になりければ、さんのおひをそきたまひける。御しけんにかはす、世にうつくしき、ひめきみにてそおはしける。十六人のもり、めのとをつけて、いつきかしつき、もてなしたまひければ、日にまし／＼て、見ます事のみそ、おほかりける。

さても、とし月をくくりたまふほとに、ひめきみ、七さいと申はるのころ、きたの御かた、にはかに、やまふつきて、したひ日々に、大事になりたまひて、日かすをくくりければ、いまはかきりと見え給ふ。かすのたからをとくのえて、うけんのかうそうに、大ほうひほうを、おこなひける。しゆくくはんかすをつくして、いのりたまふ事、かきりなし。されとも、しやうしむしやうのならい、ちやうこうかきりあれば、ちからなし。三十日と申とき、ひめきみをちかつけたまひて、おほせられけるは、「わか身は、いまをかきりとおほえたり。のちの世をは、ひめをたのむそよ。さても、これに、くはんをんのたまはりし、はちはこあり。御ちかひにまかせて、ひめ君にとらすへし」と、おほせありしかは、御まへの女はうたち、「しかるへし」とて、からのをり物のふくろより、はち箱てはばをとりいたし、蒔画しきゑ絵の手はこそ、いたかせまいらせて、そのうへに、はちをほひけり。ひめ君を見まいらすれば、御まゆもひとへにつほみたり。さても、きたの御かた、かくなん、

くはんをんのちかひめてたきはこなれば

いまそひめにはいたかせける

とゑいたたまひて、「いまは、いたくきもの」とおほせければ、

〔挿絵・第四図〕

つのかみ、はこをとらんとし給ふに、そのはち箱てはば、御くしにとりつきて、とられす。「これは、いかなる事そや」とて、かいしやくの人々、あまた、よりあつまりて、とりけれとも、ひめ君、「あら、いたや」とて、なきかなしみ給へとも、なをも、ひきあ

ければ、「いまは、いのちをとるや」とて、さけひかなしみ給ひければ、ちからなくたゝおきぬ。

これを見給ひて、大きになけきかなしみて、「われこそ、かくなり候とも、かゝるふしきのならひあらし。しやうしてするは、さため有事なれば、いたくなけき給ひそよ。我身もおとらす思へとも、あひへつりくは、つねのならいとなそらへてのみ、かさぬる。いつれのつみのむくひにて、世になき程のかたは物と也、はゝにさえ、はやくはなるらん。くわほうすくなき身とむまれきて、物思ふ事のむさんさよ。神にも仏にも、申事かなへはこそ、人事に申候はめ。なんちかうちの御でられは、はつ瀬のくはんをんにまいりて、きせひ申てみん。いたくなけき給ひそ」とて、御ひさちかくいたきて、とかくなくさめ給ひけるそ、あはれなる。

さて、きたの御かたのけうやうに、七日く、三十五日、四十九日、百ヶ日まで、さま／＼のふつしを、心のまゝにとはせ給ひける。姫君は、母この恋しさに、御はかにまいりて、「たゝ、我身をむかへとらせ給へ。たとへ、むけんならくのそこまでも、おなしくけんに、あつかりまいらせは、いかにうれしくさふらふへき。又、此かたは物、うしなひてたひ給へ」と、手をあはせ、ふしおかみ、なき給ふそ、あはれなる。

津のかみは、日かすつるまゝに、いとゝ、きたのかたの御事、思ひいてゝ、かくなん、

あさからぬちとなりしつまもけに

わかれとなればまつとしもなし

さても、姫君は、あかぬ思ひの、いつれもおとらす、一かたな

らぬ思ひのあまれば、かくなむ、

なてしこの花を見るにもわすられす

このはゝちりて野へのあきかせ

かやうにゑいして、日かすをゝくり給ふほとに、第三ねんの御ふつしをすきければ、したしき人々、あつまりて、「いまは、何になけかせ給ふとも、かなふまし。いかならん人をも、つまとさためて、姫君をもそたてまいらせ、すきにし人のけうやうを、いとなみ給ひ候へかし」と、さま／＼すゝめまいらせ給ければ、「いまは、さもありぬへし」とて、ちかきほとの人をむすめをむかへとりて、すきさせ給ふほとに、姫君は、それに付けても、なけきの色まさりける。日ころにはにつ、いしやうもわるく也給ふ。かいしやくの人もなく、あけてもくれても、「はちかつき／＼」とよはれて、よき人にもいやしき物にも、おもひさけられて、「はちかつき」とそ、いはれたまふ。

〔挿絵・第五図〕

されは、姫君は、しもゆきともきえうせはやと、おほしめしけれとも、それもかなはず、身のおき所のなきにつけても、たゝあけくれ、なくよりほかの事をなき。わか身のかなしさに、人めにかゝらしと給へは、継母の、「あら、かたはらいたや、人かましや。たゝいま、人に見せて、わらはせ」、にくきことにそし給ひける。かゝりければ、はちかつき、毎日、はゝの御はかに、まいり給ひて、ひとへに、「わか身を、むかへとらせ給へ。あまりに、継母の、にくみいとはせ給ふも、かなしければ、はや／＼、ひと所にむかへさせ給へ」とそ、なき給ひける。

継母、これを見給ひて、「われをのろひてこそ、はゝのはかに

まいり、てんにあふき、地にふし、むねをこかし給ふらん。けふよりのち、かみや仏、はかにまいるへからず。もし、なをも、まいり給ふ物ならば、ふしつけにし、いのちをたつへし」とその給ひける。姫君、我いのちのおしきとは、おもひ給はねとも、さすか、ちゝの御事をおもひ、なごりをおしみて、おしからぬいのちをすてかたく、心のほかに、たう、てらにもまいり給はす、あけくれ、はゝこせんのためとて、念仏^{ねんぶつ}申、のちの世の事を、いのり給ひける。

ある時、けいほ、つかみに、むかひての給ひけるは、「かやうに申候へは、人めわろく候へとも、おもふ事を申さねは、いかゝにて候。あまりに、はちかつきか、物をぬすみ、みこにとらせ、われをのろひ候へは、そのけにより候て、わか身も、やまひかまし、ゆめ見もあしく見え、心もみたれ、此いゑのうちに、いたくも候はず。心むつかしく候へは、はちかつきを、いつかたへも、とをくうしなはせ給へ。そのきなくは、わか身をうしなひたまふか、また、ふちかわへ身をなけ、この世になき身とならん」と、の給ひしかは、

〔挿絵・第六図〕

津のかみ、これを聞給ひて、しばらく、とかくの返事もし給はす。しきりにさまゝせめられて、「ともかくも、おほせ候はんやうにこそ」とて、さしきをたち給ひて、ひめ君をちかつけ給ひ、「いかに。なんしをちかつくる事、へちのしさいにあらず。御身かはゝにて候人に、わかれたてまつりて、そのゝちは、なんしをこそ、たくひなくおもひ、一日へんしも、たちはなれかたく思へとも、あまりにすきて、ふとうの心を、又よにもなき

事のやうに、けいほをにくみ、みこかなき、だからをぬすみとらせて、のろいはんへると、きゝしかとも、二人ともなきこなれば、きかぬやうにもてなして、すきゆけとも、いまは、人めあしくなりぬ。うたてしき名のみたつるも心うし。いかならんしま、ゑんこくへもうしなひ、ふち河へもしつめなんと、けいほはたくみはんへれとも、わかゆるしなければ、いまゝてありしなり。みやこはひろき所なれば、四条のつしにすておかは、たれかは、あはれむ人かならん。あすは、みやこにすてをくへし」と、なくゝの給ひければ、とかくの御返事をよはす、ひれふして、なくよりほかの事をなき。

〔挿絵・第七図〕

「さては、我身もすこさぬ事なれとも、けいぼのさんそうによりて、うしなはれまいらせん事かなしきよ」とて、めのとのじしうを、ちかつけて、ちゝ津のかみの御かたへ、すこさぬよしを、ちんし給ひければ、まゝはゝ、人をかたらひて、はちかつきは、きやうへのほせ、四条のつしにすて給ふ。津のかみは、これを夢^{ゆめ}にもしりたまはず、ひるはひめもす、よるはよもすから、姫君の御事を、なけかせ給ひける。

あるとき、「ひめきみ、いつくへゆきけるやらんと、よにこひしく思ふに、見えざるは」とて、めのとともに、たつね給ひければ、「此あきのなかは、ゆきかたのおほせとて、おそろしける物ともまいりて、くそくしまいらせて、『みやこのかたへ、をくり、うしなひまいらせよ』とおほせとて候しかは、『われも御ともにまいらん』と、申候しかは、『ゆめゝかなふまし』とて、とめ給ひ候へは、ちからなくとまりて候」とそ申ける。ゆ

もあり。日ををくり、夜をあかしける。

きかた、なみたにむせひ給ひ、「さては、われもしらざる事を、女はうのはからひにこそ、すてられる事のむさんさよ。いかなるふち河、とをきしま、野々すゑ、人もかよはぬところにか、すてをきぬらん」と、ふししつみ、なけき給ふそあはれなり。

〔挿絵・第八図〕

さるほとに、はちかつきは、四てうのほとりに、まとひありき給ひければ、人々おほくあつまりて、「なんしか、いたゝきたる物は、なに物ぞ。いてみて、はけ物ならば、あらはさん」といひければ、「はけものにはあらず」と申ける。

さるほとに、人おほくはしりあつまり、ふしきのおもひをなし、はちをとりてみんとしけれとも、とられす。「これはいかにや」といひければ、「はちかつき」と申ける。「われ七さいのとき、このはちを、なにとなく、いたゝきて候へは、すいつきてとられす候」と申けり。「さもあれ」とて、とりあければ、その身、ともにとりつきあかりける。きせん上下のなんによ、□□□□ちうつふき見れば、□□のほど、十四五はかりなるか、いろしろく、めのうちあさやかに、かみかたち、ふせひ、まみ、くちつきにいたるまで、うつくしきによしなり。「いつく物ぞ」といひければ、「津のくに、かたのゝほとり」とはかりそ申ける。「さて、ちゝはゝはなきか」といひければ、「はゝは、七さいのとき、むなく成給ひぬ。ちゝは、ましませとも、かゝるかたはになり候へは、継母の、もろともににくみ給ひて、捨られ候へは、かやうにまよひありき候」と申ければ、みやこの人のやさしきは、「はちかつき」とよばれて、あさゆふわひしめす、やしなふ人もあり。あるひは、いしやうをきするもの